

# 八郎潟の完新統産 *Potamocorbula amurensis*

*Potamocorbula amurensis* from Holocene Deposits  
of Hachiro-gata, Northeast Honshu, Japan

渡部 晟\*

Akira WATANABE

*Potamocorbula amurensis* (SCHRENCK) スマコダキガイは汽水域に生息する北方系の二枚貝であり、第四紀の化石としてはほぼ全国的に分布が知られている(赤松, 1980; 藤山, 1982; O'HARA, 1982; MATSUURA, 1977; 山名ほか, 1975など)。しかし現在の日本列島では青森県の鷹架沼が南限とされており(波部, 1977)\*\*、秋田県では生息が確認されていない。化石としても、秋田県では男鹿半島の鮎川層(更新統)からわずかに報告されているだけである(TAKAYASU, 1962)が、最近筆者は、八郎潟の完新統から本種の化石をかなり大量に採集することができたので、ここに報告する。八郎潟は面積約 220 km<sup>2</sup>の汽水湖であったが、干拓工

事が行われて湖底の大部分が露出し、現在では水田などに利用されている。干拓前の八郎潟に生息していた軟体動物は、井上(1965)によって14種報告されている。その内容は、汽水生種の *Corbicula japonica* PRIME\*\*\* ヤマトンジミを主体とし、汽水域から淡水域に生息する種からなるが、*P. amurensis* や海水生種は存在していない。

今回 *P. amurensis* が得られたのは八郎潟中央干拓地の大潟村内であり、大潟村役場の約 1.6 km 北東の地点である(図1)。ここを発掘し、地表から深さ20cm毎に区切って、深さ80cmまでの堆積物を採集したところ、その一部に本種が含まれていた。この地点の層序や、

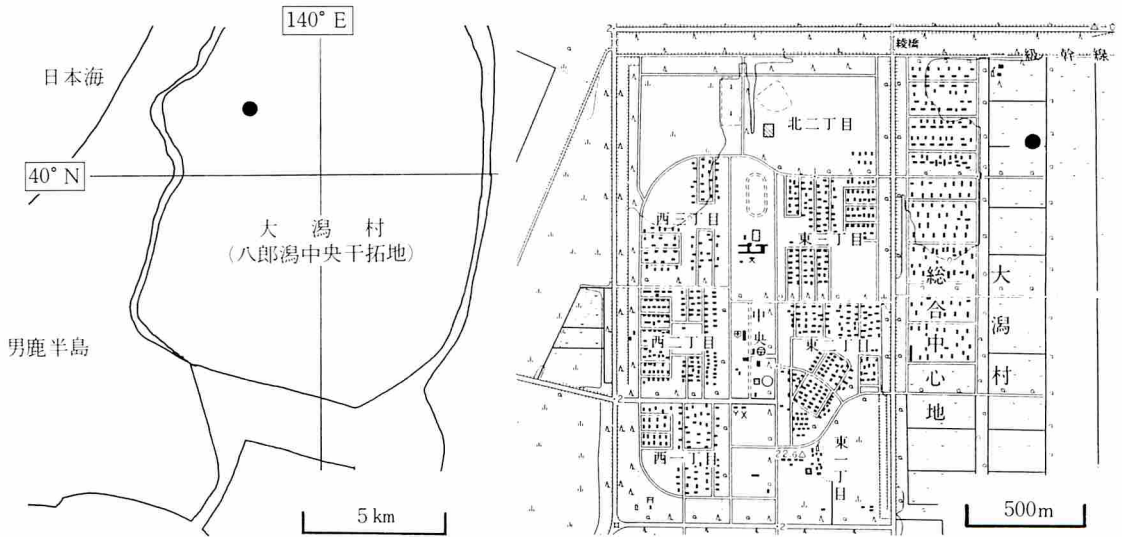


図1 *Potamocorbula amurensis* の産地 (●印) 国土地理院発行2万5千分の1地形図「大潟」を使用

\* 旧職員、現男鹿市立船川中学校教諭

\*\* 石山(1977)の調査では、鷹架沼では確認されず、その北側にある尾駮沼で採集された。

\*\*\* 井上(1965)は *C. japonica martensi* CLESSIN ニホンシジミとしているが、これは *C. japonica* PRIME の synonym である(波部, 1977)。

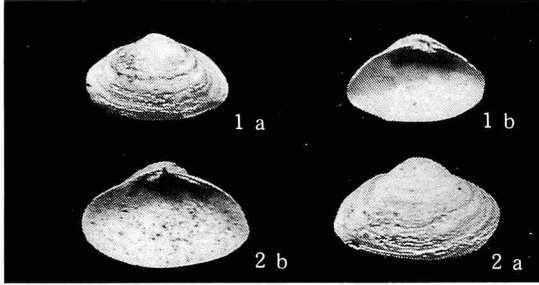


図2 八郎潟の完新統産 *Potamocorbula amurensis* (SCHRENCK)  
1 a, b : 左殻, 2 a, b : 右殻. どちらも0-20cmの堆積物から得られた(×3)

軟体動物群の詳細については改めて報告する予定なので、概略を述べる。この地点で八郎潟の堆積物は、地表から80cmまでは一部礫まじりであるが、砂層からなる。砂層中には軟体動物化石が多く、深さ約20cmまでは *C. japonica* が多量に含まれている。この部分に海水生種は見られないが、約20cmより深い部分では海水生(内湾生)の軟体動物を多量に含んでおり、中には生没状態の二枚貝化石も見られる。

*P. amurensis* が含まれていたのは、深さ0-20cmおよび20-40cmから得られた堆積物である。特に0-20cmの堆積物中に本種の個体数が多い。今回得られた本種個体(図2)の数は、殻片数で、0-20cmの堆積物中から60個、20-40cmの堆積物中から6個である。いずれも、小形の個体が大部分であり、多くは殻長が7mm程度以下で、最大の個体でも約11mmである。

ところで三位(1960)は、八郎潟の沖積層に含まれる軟体動物化石から、完新世における八郎潟の環境の変遷を、*Ostrea* 湾, *Macoma* 湾, *Raeta* 湾, *Corbicula* 湖の四つに区分して述べている。これにあてはめると、発掘した地点の深さ0-約20cmの *C. japonica* を多量に含む堆積物は、*Corbicula* 湖期のものと思われる。

干拓直前の八郎潟には、全域に *C. japonica* が非常に多く生息していた(井上, 1965)。それに対して、前述したように *P. amurensis* は生息していなかったため、本種は *Corbicula* 湖期のある時点で、この水域において絶滅したのと考えざるを得ない。両種が共に生息していたにもかかわらず、*C. japonica* は繁栄し続け、*P. amurensis* が絶滅したことは、*Corbicula* 湖期になってからの八郎潟の環境の変遷を知るうえで、

重要な事実であると考えられる。

謝辞：北海道開拓記念館の赤松守雄博士には、ヌマコダキガイの同定について御指導していただいた。大潟村の生田敏勝氏、秋田県立博物館の高橋一郎氏には現地の発掘調査に御協力をいただいた。秋田県立博物館の佐々木厚、照井紀一の両氏には研究の過程でご便宜をはかっていただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げる。また本報告発表の機会を与えられた秋田県立博物館の斎藤 長館長をはじめ、関係各位に深謝申し上げます。さらに、男鹿市の故西村 正氏には貝化石の研究全般について御指導いただいております。八郎潟の完新統産の貝化石研究についても多くのご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

## 文献

- 赤松守雄, 1980: 野幌丘陵から産出する暖流系のフォーナについて. 北海道開拓記念館研究年報, (8), 1-19, 8 Pls.
- 藤山家徳, 1982: 新生代第四紀貝類. 藤山家徳ほか編, 学生版日本古生物図鑑, 北隆館, 338-363.
- 波部忠重, 1977: 日本産軟体動物分類学, 二枚貝綱/掘足綱. 北隆館, 372 P.
- 井上晴夫, 1965: 八郎潟の沿岸及び湖底の動物. 八郎潟の研究, 八郎潟学術調査会, 秋田県, 282-335.
- 石山尚珍, 1977: 小川原湖とその北方の湖沼群について. 地質調査所月報, 28, 623-628.
- MATSUURA, N., 1977: Molluscan Fossils from the Late Pleistocene Marine Terrace Deposits of Hokuriku Region, Japan Sea Side of Central Japan. *Sci. Rep. Kanazawa Univ.*, 22, 117-162. 20Pls.
- 三位秀夫, 1960: 八郎潟の沖積層. 東北大学理科報告(地質学), 特別号(4), 590-598.
- O'HARA, S., 1982: Molluscan Fossils from the Shimosa Group (1. Yabu and Jizodo Formations of the Makuta District). *Jour. Coll. Arts and Sci. Chiba Univ.*, B-15, 27-56, 3 Pls.
- TAKAYASU, T., 1962: Molluscan Fossils from the Shibikawa Formation in Oga Peninsula, Akita Prefecture, Japan - Studies of the Cenozoic Fauna in the Akita Oil Field, Part 2. *Jour. Min. Coll. Akita Univ.*, Ser. A, 2(2), 1-19.
- 山名 巖・山本賢二・竹林慶謹, 1975: 鳥取平野沖積層の化石群集. 鳥取県立博物館研究報告, (12), 19-39.